

現代のガンジー/サミー・アワードさん

← 京都・タオサンガセンターでインタビューに応じるサミーさん。通訳：遠藤暁及



前号から連載をはじめてもらった遠藤暁及さんの推薦で、アースキャラバンの中の長崎→広島のプロサイクリングに参加するため来日したサミー・アワードさんにインタビューさせていただきました。日本の8月の暑さの中でサイクリングは大変だったと思うが無事終わったそうだ。インタビューは来日してすぐの7月上旬に京都の暁及さんの道場で行った。(あ)

プロフィール

アメリカに生まれ、生後8か月で両親の故郷であるベツレヘム（キリスト誕生の地）パレスチナ自治区）に移住する。17歳でアメリカの大学に留学し、ワシントン大学で国際関係学修士、またシカゴ工科大学で博士号を取得。その後、イスラエル占領下のベツレヘムに戻り、非暴力主義の人権平和団体「ホーリーランド・トラスト」を立ち上げる。中東に平和をもたらすべく活動している第一人者。「現代のガンジー」と呼ばれ、世界各地で講演活動を行い、アメリカの雑誌等でも広く紹介されている。

■アメリカ・インディアンとパレスチナには共通点があった!?

—— なぜ、ご自身が立ち上げた平和団体を「ホーリーランド・トラスト」と名付けたのですか？

サミー● 私が在住している土地は、様々な名前前で呼ばれています。パレスチナ、イスラエル、ヨルダン川西岸、サマリアなどです。また同時に、イスラム教、ユダヤ教、サマリア人、またキリスト教など、いずれの宗教の人にとっても聖地（ホーリーランド）なんです。

—— なるほど。

● さらに「トラスト」という言葉には2つの意味があります。1つは人間同士が信頼し合うということ。もうひとつは「預かる」(「トラステーズ」/trustees) ということ) です。

聖地、あるいは土地は、人間が自然、創造者、あるいは神と呼ばれる存在からお預かりしているものであって、誰のものでもありません。人間が一方向的に所有したり、奪ったりするものではないのです。

私たちは、この聖なる大地を争うことなくケ

アし、正義と平等の中でお互いを尊重して生きていけるようにしなければなりません。そうしたメッセージを込めて活動したいと思い、「ホーリーランド・トラスト」と名付けたのです。

—— 「土地が人間が自然から預かっているもの」という考え方は、アメリカ・インディアンの考え方と非常に近いですね。

● そうですね。また、状況的にも似ています。ネイティブ・アメリカン（インディアン）の大地や生存権がヨーロッパからの移住者たちによって奪われたのと全く同じ惨劇が、今も尚、パレスチナでは起こっているのです。

ご存知のようにアメリカ開拓時代、ヨーロッパから押し寄せた移住者たちの銃によって、ネイティブ・アメリカンの人々とその生存に必要なバッファローたちは殺されました。聖なる大地も奪われました。

イスラエルには毎年多くの移住者たちが、世界各地のユダヤ協会を通して送られて来ます。彼らが住むことになる入植地は、パレスチナ人の農地や水源を次々と奪うことで作られていくのです。

—— そうだったんですか、.. ! ?

● そもそもイスラエルは紀元前70年から「フィリスティナ（パレスチナ）」と呼ばれていた土地に、1948年になって建国されたのです。

当然、そこには先祖代々、何千年も前から住んでいた住人たちがいました。しかしイスラエル当局によって385の村が破壊され、ブルドーザーで住んでいた痕跡も消されました。

—— うーん、...

● そこに住んでいた住民は、銃を持つ相手に、「今日からあなたたちは出て行きなさい」と言われて追い出されたのです。有無を言わず殺された人たちも多くなります。長年、住んでいた土地からパレスチナ人を追い出すイスラエル政府の根拠は、「聖書に、「ここはユダヤ人の土地だ」と書かれているから」というものでした。

—— そうだったんですか!?.、アメリカは、現地の住民を虐殺し、その土地を奪うことで建国されました。また、その後も非白人である生き残ったネイティブ・アメリカンには、長い間、白人と同じ権利が与えられませんでした。パレスチナでは今も尚、同じようなことが続いているんですか？



(2) 名前のない新聞 No.207 / 2018年9・10月号

→ 住む家を破壊されて嘆く家族。炎天下の砂漠に放り出される。写真提供... Hatham Khaib ©



● 例えば現在、パレスチナ人は、自分の土地であっても家を建てるのが事実上、禁止されています。パレスチナで家を建てる、ある日、イスラエル軍がブルドーザーでやって来て破壊するのです。イスラエル軍による家屋破壊は、C地区や東エルサレム等、あらゆるところで起こっています。

村全部が破壊されることもあります。彼らはそのようにして、国際法的に違法なイスラエル人の入植地を造るのです。それらの不法行為を国連が非難しても、また国際法廷で違法と判決を下しても、イスラエル政府は無視し続けています。

—— 何ともそれは、驚きですね。

● イスラエルは今も尚、入植地を拡大し、中東戦争後、僅かに残されたパレスチナ人の土地や水源はさらに奪われ続けています。子供たちが、イスラエル軍が撃つ催涙弾の中を通学することもあります。また、占領に立ち向かう民衆への投獄や迫害も、後をたちません。

入植者は狂信的な極右の人が多く、農民のおばさんを棍棒で滅多打ちにしたり、ベドウィンの羊飼いに暴力を振るうなども、日常的に起こっています。

■ “人々には、良き未来へのビジョンを持って欲しい”と語るサミーさん

● しかし私は、信じています。悲しいことにパレスチナ人の権利はこの100年、ずっと否定され奪われて続けているけれども、いつか必ず、全ての人々が同じように平等な権利をもち、平等に尊重される状態になる日が来るに違いない、と。

私たちの闘いは、そのためのものなんです。でも、それは決して政治的な解決や、暴力による解決を求めるものではありません。

なぜなら、政治的な解決がもしあったとしても、心の中に差別や迫害があったら同じことだからです。私たちの闘いは、政治的解決に至るまでに、モラルや良心など、人間としての基本

的、平等の権利を主張することで応えます。非暴力に加え、私たちが行っているのは、ヒーリング（癒やし）です。ヒーリング・ワークとは、相手の無知と恐怖を取り除くことです。例えばユダヤ人には、ホロコーストなど、悲惨な迫害を受けた歴史があります。それもあって、ほとんどでのイスラエル人は今も尚、恐怖の中に生きています。

ナチスは、“ユダヤ人が国を滅ぼす”という恐怖を人々に刷り込むことで、政権を取ることに成功しました。イスラエル政府もこれと同様の手法を使っています。

—— そうなんですか！？

● はい。イスラエル政府やマスコミは、“パレスチナ人は私たちが皆殺しにしようとしている”と、常にイスラエル民衆に刷り込みを行っています。恐怖を道具に人々を洗脳し、人心をまとめているのです。

徴兵制があるイスラエル政府は、自国民が子供の頃からパレスチナ人に対して恐怖を抱くように教育しています。

その結果、多くのイスラエル人がパレスチナ人を“悪魔的なテロリスト”だと信じています。彼らがそんなウソに、いとも簡単に騙されてしまうのは無知と恐怖によるものです。

恐怖は、同じ民衆であり、本来ならば敵同士ではないイスラエル人とパレスチナ人を分断し、お互いの壁をつくります。さらに無知と恐怖が権力と結びつくことで、圧制・抑圧・迫害を生むのです。

—— なるほど、...

● その他、ホリランドが行っている活動には、変容（トランスフォーメーション・ワーク）をもたらすものがあります。これは私が学んだ、伝統

的なあり方を示すことなんです。だからこそ、イスラエルによるパレスチナ人への暴力に対して、私たちは非暴力によって闘うのです。迫害に対しては、人間の権

的な仏教の思想から生まれたものです。

私たちは毎日、様々な選択や決断をして生きています。何を食べるのか？ 何を着るのか？ 何を話すのか？ 選択と決断は、人生を左右する最も大切な要素です。もっとも私たちは、自ら行っている選択や決断が、無意識のどこから来たかには気づいていません。

私たちが行う変容のワークショップには、イスラエル人もパレスチナ人も、また海外の人たちも参加します。そこで彼らは気づくのです。たとえ自分が、未来のための選択と決断をしたつもりであっても、その多くが過去に体験したり、誰かに言われた言葉が無意識に刷り込まれた結果だった、ということに。

—— ト라우マがあったらそれに囚われてしましますよね。

● はい。過去の刷り込みから自らを解放し、過去から学びはするけど、どのような未来を創りたいかを前提に行動するようになることが必要です。

政治的リーダーも人間なので、過去の体験や刷り込みに基づいて決断していることがほとんどです。本来ならば彼らは民衆のために、築くべき未来を前提にするように“変容”しなければなりません。

パレスチナやイスラエルの人たちに、“両者が平和になることは可能だと思いますか？”と質問すると、ほとんどの人は“NO”と言います。

なぜかという、イスラエルによる占領がいつまでも続き、平和な時がなかったからです。しかし私は、政治家にも平和活動家にも、また何よりも一般の人々に良き未来へのビジョンをはっきりと持って欲しいのです。どのような未来を創りたいのかをまず決めて、それに向かって行動してほしいのです。

このため私は、今申し上げた「非暴力」、「癒し」、「変容」という3つの柱を元に、人間を再教育するプログラムを作ったのです。そして人種、宗教、国籍の別なく、世界各地でワークショップを行っています。

■ アースキャラバンと共に活動するのは？





↑アースキャラバン熊本 at 宇土教会の様子

—— 今回の来日は、アースキャラバンに参加するためと聞きましたが、その目的は何でしょうか？

● アースキャラバンは日本から世界各地へと発信されています。その日本に、海外の人は皆、関心を寄せています。私は、日本が国際的にも大きな影響力のある国だと思っています。そんな日本の方々に、パレスチナの現状と人々の苦しみを知らせてもらいたいという想いがあります。

またパレスチナだけでなく、世界各地で様々な迫害や人権侵害が起こっています。私は、アースキャラバンが世界中から暴力を無くすためのグローバル・ムーブメントだと認識しています。私にとっても、アースキャラバンはとても大切なものなんです。

74年前に広島・長崎で起きたことは、地球規模のカタストロフィー（破局、災厄）でした。しかし日本の人々は、あの“核のホロコースト”の痛みを通して、平和の大切さを示して来た。世界の人々はそう思っています。“No More ヒロシマ”とは、世界のどこも爆撃しないことだ、と。

一方、イスラエルは、ホロコーストの体験を通して世界の平和を創るのではなく、未だに恐怖と憎しみの中に住んでいます。そして、“自分たちさえ安全であれば良い”と考えています。これは大きな違いです。

また、イスラエルは、外国からの検査を絶対に受け入れません。その理由はご存じですか？ 彼らは原爆を持ってるのです。

—— アメリカが国連などで妨害し、イスラエルを守ろうとしているということもありますね。

● アメリカが擁護するイスラエルは原爆を保有する危険な国であることを、世界中の人々は知る必要があると思います。

そもそも、“No More アンネ・フランク”(ナチスに殺されたユダヤ人の少女)とは、本来、“世界の誰の人権もが守られるように”、という願いであるはず。なのにイスラエルは、“たと

えパレスチナ人の人権を奪ってでも、わが身だけは安全にしよう”という、本末転倒の心になってしまっているのです。

だからこそ私は、世界は日本から学ぶべきだ、と考えています。日本人は、過去の戦争の体験から憎しみと戦いで生きたくないと考え、核の暴力や戦争を放棄し（編集部注：憲法9条のこと）、平和の道を選んだのだと思います。このため、かねてより私は、日本に来たい、と思っていたのです。

—— 日本人から見たら、日本はそんなに素晴らしい国ではなくて、政治的にも社会的にも矛盾だらけの国なんですけど、、、

● だとしたら尚、今私たちは一緒にやらないといけませんよ。(笑) 日本を本来の姿に戻すためにも、ぜひ一緒にやりましょう！

アースキャラバンは、世界中とつながったムーブメントです。だから私は今回、ベツレヘム市長から託されて、平和メッセージを日本に持って来ました。アースキャラバンに参加することで、「ベツレヘムから日本に、そして日本から世界へ」と、平和メッセージを届ける橋渡しをしたいと思っています。

■非暴力の象徴と現代のガンジー

—— ところでサミーさんは「現代のガンジー」と呼ばれ、アメリカの雑誌でも紹介されているそうですね。ご自分としてはどう感じますか？

● 世界の人々にとってガンジーは非暴力のシンボルです。だから、そう呼ばれるなんて、恐れ多くて身が引き締まるような感じがします。また世界各地には、素晴らしい活動をしている多くの人たちがいます。そのような人々とどう繋がって、世界のために共に働けるだろうか？ということを考えます。

—— パレスチナの闘いというと、インテリファダで石を投げたり、あるいはハマスがロケット弾を撃ったりというイメージがあるんですが、、、

● 10m先に石を投げる少年に対し、1km以上も手前のイスラエル兵がスコープで撃つのです。また、もしハマスのロケット弾に本当に効果があるなら、ガザはすでに牢獄状態ではないはずです。

—— サミーさんはどうして非暴力活動をするんですか？

No.207 / 2018年9・10月号 (3)

● パレスチナにおける非暴力主義は、私が始めたわけはありません。あまり知られていないかも知れませんが、70年以上前から、パレスチナの民衆は非暴力で抵抗してきたのです。これは、イギリスに占領されていた頃からのパレスチナの伝統です。そして私は、このことを誇りに思っています。

—— そうだったんですね。

● また私自身、非暴力は大切だと思っています。それにはたくさんの理由があります。まず非暴力は、武力を持って行く闘いよりも、はるかに有効であるということです。イスラエルはアラブ諸国で最も強大な軍力を持っており、武力をもってして勝てる相手ではありません。私がやっている非暴力トレーニングのワークショップでは、次のような例をあげて説明しています。“例えば、近所に悪さをする人間がいたとします。その人間は相撲の横綱です。だから、その相手と相撲で決着をつけようとするのは賢いことではありません。むしろ同じ土俵に上がらず、相撲を取らないことが大事です。非暴力によって、イスラエル軍が武力を使わないように仕向ける方が、よほど良いのですよ”、と。

—— なるほど、、、

● 2つ目は、スピリチュアルな理由によるものです。そもそも私自身が、人を傷つけることはしたくありません。誰かが私を傷つけて、私が傷つけ返したら、傷つけ合うというサイクルがずっと世代を超えて続くことになります。これでは、復讐の連鎖になるだけで、いつまでも争いが終わりません。

私が非暴力のパワーを信じているのは、それが武力を無力化させると思うからです。武力による抵抗は、相手をして、武力による権力の行使に執着させます。

非暴力はむしろ逆に、相手を武力から離れさせるのです。もちろん非暴力には、何の保証もありません。しかし世界中の研究から、非暴力の方が暴力よりもずっと成功することがわかっています。

だから私たちは、武力による迫害に対して、非暴力で立ち向かうのです。それによって、パレスチナ人に暴力を奮っているイスラエル人自身が、もうこんな非人間的なことをしてはいけない、といつしか気が付くのです。非暴力には、人を正気に戻す力があるのですね。

★サミーさんのトーク / アースキャラバン熊本 at 宇土教会 <https://goo.gl/oAEUCJ>

★EARTH CARAVAN アースキャラバン <https://www.earthcaravan.jp/>

★「サミー・アワードさんスピーチ @熊本」で Youtube を検索してください。

